

大学の世界展開力強化事業(2021年度選定) 立命館大学・立命館アジア太平洋大学 取組概要

【事業の名称】(選定年度2021年度・(タイプA②))

東アジアグローバルリーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス

【交流推進事業の概要】

「日中韓を共に移動しながら、3カ国の人文学を現地の言語で学び合う」という第2モードまでのプログラムを基盤とし、新たに日英2言語教育を行う立命館アジア太平洋大学(以下、APU)をコンソーシアムに迎える。持続可能な日中韓共同運営教育モデルを、東アジアや世界で活躍するグローバル人材育成を目指す各国の大学で応用可能なものとして提示することで、本事業団がキャンパスアジア事業の拠点としての役割を持続的に果たしていく。

【交流プログラムの概要】

新しいキャンパスアジアプログラムは以下の3コース制で運営。

1. キャンパスアジア(CA)コース: 中国・韓国に1年ずつ2年間留学する従来の枠組みを継承したコース
2. アジアグローバル(AG)コース: 英語圏への進出を目指す優秀層のため中国・韓国留学にAPU留学を加えたコース
3. インテンシブアジア(IA)コース: APU生が言語習得と文化理解を目的に中国・韓国に1学期ずつ1年間留学するコース

【本事業で養成する人材像】

日中韓の全ての言語を駆使し、文化・歴史・社会を深く理解しつつ、それに英語のスキルも可能な限り加えた高いコミュニケーション能力を発揮できる。それらを通じて、互いの立場や考え方を尊重する中で、文化的な国際交流や教育研究の分野、経済分野など国際協働の場で活躍できる優秀な人材。

【本事業の特徴】

①体系的な派遣前教育と多様な東アジア人文学専門講義

- ・派遣前教育: 2か国語学習の体制強化、異文化理解・多文化間調整等の能力を養うための小集団教育の実施
- ・移動キャンパス: 日中韓の学生が学び合い、東アジアをグローバルな視点から理解するために特化された専門科目講義の開講

②大規模な日中韓国際交流の実現

- ・これまでの日中韓学生交流数: 549名(日本学生282名、中国学生149名、韓国学生118名)
- ・これからの日中韓学生交流数: 4大学のキャンパスに常時240名程の日中韓学生が在籍

③東アジアから世界へー実践的な英語力の強化

- ・国際色豊かなAPU: 世界各国からの留学生とともに英語で運営される専門科目を履修、実践的な英語力の養成

④移動キャンパス時のピアラーニング・ピアサポート体制

- ・プログラム生以外の自国学生との交流、日中韓の学生が支え合うメンター制度の構築

⑤教育効果の分析と発信

- ・学生へのアンケート調査、研究者による共同研究、プログラムの成果の発信

⑥教育の質保証に繋がる安定した運営体制

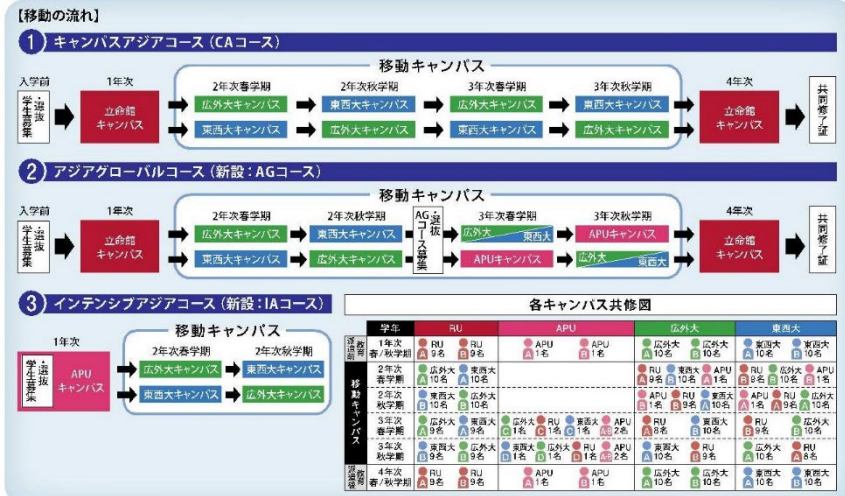
- ・定期的な会議運営: 3カ国教職員合同会議、3カ国教授会、各大学内プログラム会議、科目担当者会議

⑦キャリア形成支援

- ・国内外でのインターンシップ、OB・OGと連携したキャリアセミナーの実施、同窓会での修了生と現役生の交流・情報交換

【交流予定人数】

| | | 2021 | 2022 | 2023 | 2024 | 2025 |
|----|-------------------------------|------|------|------|------|------|
| 派遣 | 実際に渡航する学生 | 32 | 76 | 78 | 74 | 74 |
| | 自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生 | 29 | 38 | 38 | 38 | 38 |
| | 実渡航とオンライン受講を行う学生 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 受入 | 実際に渡航する学生 | 36 | 65 | 73 | 80 | 80 |
| | 自国にて国際教育・交流プログラムをオンラインで受講する学生 | 33 | 40 | 40 | 40 | 40 |
| | 実渡航とオンライン受講を行う学生 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |



1. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

【東アジアグローバルリーダー養成のための、日中韓共同運営移動キャンパス】(採択年度 令和3年度)

■ 交流プログラムの実施状況



〈韓日ジュニアフォーラムへの参加(韓国・釜山)〉

○コロナ禍における立命館プログラム生の学び

今年度は、韓国への渡航が2年ぶりに実現した。東西大学校では、授業以外にもサークル活動、ランゲージ・エクスチェンジ、CAP文化フェスティバルなど、さまざまな交流機会やイベントが用意され、学生たちは制約が多い中でも現地での留学生生活を満喫した。中国は引き続きオンライン授業となったが、中韓のプログラム生とともに学び議論をすることで、現地での留学同様に多様な価値観に触れ、相互理解に基づく多角的な思考方式を身につけるとともに、各国プログラム生との交流を深めた。

○コロナ禍における中韓プログラム生の学び

春・秋学期を通して来日中止を余儀なくされたが、CAP専門科目、日本語履修科目(必修科目)の提供および、教養科目、文学部専門科目(選択科目)もすべてオンラインで実施することで、中韓プログラム生の学びを充実させ、実践的な学びを継続させた。オンラインによる3大学合同授業や学生交流会も実施した。

交流プログラムにおける学生のモビリティ

○日本人学生の派遣

韓国へはプログラム4期生6名(2周日)、5期生8名(1周日)が現地渡航し、4期生1名(2周日)がオンラインでの留学となった。中国は広東外語外貿大学からの提供科目を4期生3名(2周日)、5期生10名(1周日)がオンラインで受講した。また、6期生19名が中韓プログラム生とのオンライン結団式に参加した。さらにオンラインで運営されたキャンパスアジア演習Ⅲ・Ⅳでは立命文学部生6名と中韓プログラム生が調査研究・発表・討論を行い、キャンパスアジア演習Ⅱでは6期生19名と中韓プログラム生が日中韓歴史教科書比較を行うなど、日中韓共修学習を実現させた。

○外国人留学生の受入

コロナ禍により日本への渡航は叶わなかったが、立命館大学から提供されるキャンパスアジア・プログラム専門科目、日本語履修科目などを自国でオンラインで受講した。中国・韓国の4期生・5期生を受け入れ、中国20名、韓国11名に単位授与を行った。

| | R3 | |
|-------|----|----|
| | 計画 | 実績 |
| 学生の派遣 | 61 | 72 |
| 学生の受入 | 69 | 93 |

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○4大学教職員合同会議・実務者会議、CAP教授会のオンラインでの実施

令和4年度より立命館アジア太平洋大学(APU)がコンソーシアムに加わることから、6月に臨時4大学教職員合同会議を開催し、4大学間合意形成について確認した。さらに、同月に3大学教員会議、12月には4大学教職員合同会議で新プログラムについての意見交換を行った。また、9月と2月にはCAP教授会を開催し、修了生の認定及び、各国の現状の共有、授業内容の確認・調整を行い、次年度以降の新プログラムの教学についても議論を重ねた。

■ 外国人学生の受入及び日本人学生の派遣のための環境整備

外国人学生には、全面オンラインでの授業が継続したことから、履修登録や学習ツールの使い方などの履修ガイダンスを行い、オンライン上でもプログラムの学びを継続できるようサポートを続けた。日本人学生には、オンラインによる中韓プログラム生との交流機会の提供や、イベントを開催することで移動キャンパスのイメージを具現化することを図った。また、入学時に4年間の履修やプログラム独自の学びに関するガイダンスを行った。渡航前には移動キャンパスの手続きやビザ取得、危機管理、健康管理に関するガイダンスを開催し、現地での学びを滞りなく進めるための支援に努めた。またオンライン留学を行う学生には、学習空間の提供やWi-fiルーター貸与などの便宜を図った。

■ 事業の実施に伴う大学の国際化の状況情報の公開、成果の普及

令和4年6月に開催された異文化間教育学会第43回大会の公開シンポジウムにおいて、立命館大学教員による教育効果に関する学術的検証経験の報告および、CAP修了生による報告を行った。修了生からは、学習者の視点からキャンパスアジアを通しての学びの経験が紹介され、グローバル人材養成のこれからの可能性について、参加した研究者とともに考える場となった。

■ グッドプラクティス等

○『多言語学習ハンドブック』の刊行と成果公開

本プログラムの協力のもと、立命館大学文学部湯川笑子教授らによりキャンパスアジア・プログラム生の言語習得や言語使用状況の調査・分析がすすめられており、令和4年4月に、プログラム生のみならず、複数言語学習者に広く資するべく、これまでのプログラム生の経験や、言語教育関係者の知見をまとめた『多言語学習ハンドブック』を刊行した。複数言語教育研究者や現役プログラム生に配布するとともに、公式WEBサイトに掲載し、成果を公表した。



〈異文化間教育学会シンポジウム〉